**特別講演要旨**

**マードックとサミュエル・ベケット**

**平井　杏子**

　マードックのベケットへの傾倒は、大戦初期のオックスフォードで『マーフィー』の朗読を耳にして以来のことで、やがてベケットの初期作品『マーフィー』と『ワット』のボヘミアニズム、ピカレスク性、あるいはアイルランド的ブラック・ユーモアが『網の中』に浸透したことを、マードック自身もしばしば口にし、批評家たちも指摘してきた。しかし以後のマードック作品との関係が論じられることはまったくなく、マードックも熱狂は一時期のものであったと述懐している。しかし両者の関係は果たしてそれだけのものだったのだろうか。

　ベケット離れと見える発言は1970年頃から繰り返されるが、その理由がマードックの口から明確に語られたことはない。ただ、ベケットが英語を放棄してフランス語による創作に偏り始めたこと、極限のストーリー性を維持した『ワット』以降、物語性が崩壊していったことなどを、その理由として示唆する発言がある。しかし、ベケットが『マーフィー』執筆当初からすでに言語の極小化と禁欲を目指し、フランス語と英語、交互の執筆、翻訳を目指していたことは知られる通りであり、また〈しけた唯我論者〉マーフィーが、ベケットによって肯定的な人物として生み出されたことも間違いない。

　ある時期から〈反唯我論者〉としての立場を貫くようになったマードックが、これらの事実を看過するはずはなく、もしマードックの関心が彼女自身が言うように、ボヘミアニズムとピカレスク性以外のものに向けられていなかったと仮定すれば、マードックのベケット理解は、残念ながらきわめて浅薄なものであったと言うしかないだろう。

　マーフィーの屋根裏部屋はライプニッツのモナド的空間として生み出されたもので、すべての宇宙を内包するこの〈バロック的唯我論〉の空間には、〈唯我性〉を外部、あるいは他者へとつなぐ唯一の道筋が見えるが、マードックがライプニッツに心を寄せたという事実はこれまでのところ明らかにされていない。だとすれば、この〈唯我性〉を越える、さらなる魅力が、マードックを強く捉えていたと考えなければならないだろう。

　事実、マードック作品へのベケットの影響は、彼女自身が述べるように一過性のものではけっしてなかった。『マーフィー』におけるデカルトの霊肉二元論へのパロディは『魅惑者から逃れて』にも『ブルーノの夢』にも受け継がれているし、『マーフィー』の物語構造は『ブルーノの夢』に、『ワット』の一部分の構造は『召使いたちと雪』に明らかに移し替えられている。とくに、アルツハイマー発症後に執筆された『ジャクソンのジレンマ』に、断片的に散見される『ワット』や『ゴドーを待ちながら』、『クラップ最後のテープ』との類似は、マードックの無意識の層に沈潜したベケットの影響を思わせる。

　また、1976年に現代文学のオブスキュリティについて質問を受けたマードックは、ジョイスやベケットを危険な例のひとつとして挙げながらも、彼らには特殊な才能があること、そしてとくにベケットのオブスキュリティは、〈イノセント〉で〈意図しない〉ものであるがゆえに容認できるものであると、やや我田引水とも思われる弁護を行っている。

　マードックのこの発言は、ベケット作品の緻密さを知るものにはきわめて意外に思われる。しかし振り返って考えれば、マードックがベケットの〈イノセント〉と見たものにこそ、彼女を魅了した何ものかがあると考えるべきだろう。マードックが敢えて言及しなかったという事実にこそ、マードック作品の本質に及ぼしたベケットの影響が窺えるという言い方もできる。マードックがそれをプラトニズムと繋いだか、神秘主義的な修道と結んだは定かでないにせよ、今後、両作家の関係は綿密に考証されていく必要があるだろう。